

甘く危険な交換条件

M e i & R y u s e i

橘 柚葉

Yuzuba Tachibana



エタニティ文庫

目次

甘く危険な交換条件

5

嫉妬は恋のエッセンス？

273

書き下ろし番外編 甘く危険な昼休み

311

甘く危険な交換条件

第一章 真夜中のオフィスは危険がいっぱい

「はあー、もう。私のバカ！ バカ！ バカ!!」

メイは、ゆるくウェーブのかかったセミロングの髪をガシガシとかき上げた。乱れてしまった髪を直しめせず、駅天井を見上げてため息をつく。

今から十五分前の午後十一時、やっと残業を終えたメイは、疲れた身体を引きずり、なんとか駅までやって来た。だが、駅の改札前でカバンから定期を出そうとして気がついた。いつも定期と一緒にカバンの内ポケットに入れている、自宅の鍵がないということに。

「う、うそお」

思わず叫んだあと、急に恥ずかしくなってきたあたりを見回す。だが、帰路を急ぐ人たちは、メイの大声など気にしていないようだ。

(どうしよう……。泣きたい。本当に泣きたい)

改札前でカバンをごそごそと漁っていたメイだったが、こんなところには通行人の邪魔になつてしまう。

慌てて券売機の隅まで移動し、あらためてカバンの中を確認する。しかし、やっぱり鍵は見つからなかった。

どこかに落としてしまったのだろうか。

今日一日の記憶を必死にたどり、会社のデスクの引き出しに鍵を入れたことを思い出した。

どうして今日に限って、そんなところに鍵をしまったのか。

ああ、そうだ——昼休み、社外でランチをすることにになり、鍵を落としたら大変だと考えたからだ。

つい先日、メイは家の鍵をなくしてしまった。

しばらくして自宅のクローゼットから見つけたのだが、同居している両親と二人の姉からはさんさん注意された。

とはいえ、今回は別になくなったわけではない。明日も仕事で会社に行くのだから、今日はこのまま帰ってしまったかった。だが、メイにはそれができなかった。いつもなら誰かしらいるメイの家。しかし、今日は誰もいないのだ。

両親は商店街の福引きでなんと特賞が当たり、温泉旅行に出かけてしまっている。

そして両親がいらないのをいいことに、二人の姉は友達の家泊まりに行くと言っていた。

だが、本当のところはわからない。

おそらく二人とも、彼氏の家にいるのではないか。

（はいはい、私は一人寂しく今日も残業ですよ。どうせ彼氏なんていませんからね）

メイは大きく息を吐くと、カバンを持ち直す。

（会社まで徒歩十分。意外と遠いんだよね。だけど家には誰もいないし……）

「ここにいっても始まらないよね。……仕方ない、戻るか」

そして、メイは会社に向かって歩き出した。

水沢メイ。二十六歳。独身、彼氏いない歴は一年ちよつと。

小柄で、どちらかといえば幼い顔立ちをしている。

メイが勤めているのは、阿藤フードという冷凍食品やチルド食品を主に取り扱っている会社だ。

一般の消費者ではなく、ファミリーレストランなどの外食産業向けに商品を開発・生産して卸している。

自社工場をいくつも持ち、系列の飲食店も展開していて、この業界ではけっこう名の

知れた会社だ。

メイは、その阿藤フード本社の企画部商品開発課に所属している。

仕事はやりがいがあつて面白く、課内の人間関係も良好。

ただ、文句をつけるとすれば残業がかなり多いことだろうか。

仕事は好きなメイだが、残業があまりに続きすぎたせいで、前の彼氏からは振られてしまった。

仕事と嘘をついて浮気をしているのではないかと、あらぬ疑いをかけられたのだ。

それからは、恋人もできず仕事漬けの毎日をおくっている。だが、気がつけば結婚する友人が増え始め、この頃、メイも少しだけ結婚を意識するようになった。

（……だけど、仕事は楽しいし、会社に行くのが好き。今のところは、これでいいもん）
メイはそんなことを考えながら、会社へと急ぐ。

（それに、会社には憧れている男の人もいるしね）

遠くで見つめるだけの恋だが、メイにとってはそれで満足だった。

時おり社内で見目にする彼の姿。今日は会うことができるだろうか、毎日ワクワクしながら出勤している。

まるで中学生の恋のように幼く見えるかもしれないが、メイは楽しくて仕方なかった。「そういうえば、今日は見かけなかったなあ」

メイは一日のことを思い出し、ガツカリしたように眩くらいた。

カツカツとヒールの音を響かせながら歩いていると、ようやく阿藤フードの本社ビルにたどり着いた。シャッターの下りた正面のエントランスを通り過ぎ、従業員専用の裏口にまわる。

先ほど別れたばかりの守衛を見つけ、メイは声をかけた。

「こんばんは」

「あれ？ 水沢さんじゃないかい。さつき帰ったんじゃないの？」

残業続きで、メイは毎日この裏口から帰る。守衛にも、すっかり顔を覚えられてしまった。

首をかしげる守衛に苦笑いし、社員証を見せながらメイは事情を話す。

「家の鍵をデスクに忘れてきてしまったんです。取りに行ってもいいですか？」

「いいけど、一人で大丈夫かい？」

守衛は心配そうな表情でメイを見つめてくる。確かに社内は薄暗いし、もう人もほとんど残っていないだろう。

メイは少しだけ怖くなったが、それを振り払うように笑みを浮かべた。

「大丈夫です。じゃあ、行ってきますね」

気をつけてね、という彼の優しい言葉にうなずき、メイはビルに足を踏み入れた。

一階フロアにメイの足音だけが響く。メイは、急いでエレベーターホールに向かった。エレベーターは一階に停まっていたようで、ボタンを押すとすぐに扉が開く。

「うー、なんか気味が悪いなあ」

エレベーターに乗り込み、メイは二十二階のボタンを押した。気のせいか、上昇の速度がいつもより遅いように感じられる。

やがて、チンという音ともに扉が開いた。

どの部署も明かりが消えていて、もちろん誰もいない。

(……やっぱり一人じゃ怖い。早く鍵を取って帰ろう)

ビクビクしながら商品開発課に向かって歩いていたら、メイはある異変に気がついた。

「……あれ？」

誰もいないはずの商品開発課から、明かりがかすかに漏もれている。

最後に課を出したのはメイだった。その際、電気はすべて消したはずだ。

(もしかして、消し忘れちゃったのかしら?)

首をかしげながら扉に近づくと、中から人の声が出た。——それも、女性の甘い声だ。おそるおそる扉を押し、そっと中を覗のぞき込む。そしてメイは、目を大きく見開いた。

思わず声をあげそうになるが、ぐっとこらえる。

そこにいたのは、阿藤フードの若き社長と、商品開発課の主任でメイのよき先輩でもある冬川だった。

「っ……あ……ンツ……やあ！」

「本当にイヤ？ イヤならやめるけど」

「ンツ!!」

「さっきより締めつけて……どうした？ そんなに欲しいのか？」

「はあ……っ……ん！」

室内は、中央にだけ明かりがついている。

その真下にあるデスクの上で、二人は激しく抱き合っていた。

部下であるメイたちを、優しく、根気強く指導してくれる冬川。時には厳しいが、そのあとのフォローも決して忘れない。メイの尊敬する女性だ。

そんな冬川が今、社長と淫らなコトをしている。彼女の艶っぽい表情に、こちらまでドキドキしてしまう。

(早くここから立ち去らなくちゃ……)

そう思うメイだが、身体が震えて動かない。

それに、今、情事が行われているのは、メイが使っているデスクの隣だ。

(鍵、どうしよう……)

取りに行きたいが、あんなことをしている最中に、室内に入れるはずがない。

「やだあ……もう、なんとかしてえ」

「頼み方がなっていないな？」

服を着たままの冬川の足を抱え、社長はスカートをまくり上げた。

その片方の足には、引き裂かれたストッキングとショーツが引っかけかかっている。

冬川は恍惚とした表情で、社長に「お願い」をした。

「欲しいの、広海さん。もっと……シテ」

「たまらないな、巴」

熱にうかされたような声でそう言うと、社長は冬川の腰を掴んで激しく動き出した。

それと同時に、ギシギシとデスクが軋む音が響きわたる。

(これはきつと夢なんだ。絶対に夢だ！)

メイの顔は真っ赤に染まった。

以前、冬川に恋人はいないのかと聞いた時、「そんなの、いないわよ」と言っただけでカラ笑っていた。

冬川は毎日忙しく、メイよりも残業や休日出勤が多い。だから恋愛する時間なんてないのだらうなど、納得していたのだが――

(そりゃ、社長が彼氏だなんて言えないよね……)

それにしても、冬川の相手が社長だったとは……メイはただ呆然とするばかりだ。容姿も家柄も完璧な彼は、女子社員たちの憧れである。また、彼が社長になってから、阿藤フードはますます業績を伸ばしていた。

社長は穏やかで寡黙な人だと社員の間では言われているが、冬川を押し倒している今は、ずいぶんと印象が違う。

(社長ってば、隠れ野獣……?)

思わずそんなことを考えていた時、ふと、ある男性の顔が浮かんだ。

社長の実弟で、阿藤フードの専務である阿藤竜生だ。社内では、社長の隣にいることが多い。

メイの視線は社長ではなく、いつも竜生へと向けられていた。

メイは、竜生に恋をしているのだ。

彼に想いを寄せるきっかけとなったのは、一年前のある出来事。

その時、メイと竜生は一度だけ言葉を交わした。

それも、お互い最悪なシーンのあとで。

「別れようか。もうメイを信じることができない」

一年前、メイは彼氏に浮気を疑われて、振られてしまった。

さようならという言葉を残し、喫茶店を出て行く彼。メイは、何も言わずにそれを見送った。

呆然としていたメイは、席を立つことができなかった。

そして、彼との今までの時間をあれこれ思い出し、あまりにも呆気なく終わってしまった恋に胸を痛めた。

テーブルの上のオレンジジュースは、中の氷が溶けて薄くなってしまっている。

グラスを指でなぞると、水滴がテーブルに落ちていった。その様子は涙を流しているようにも見えた。

しばらくして、メイは荷物を手にし、ようやく席を立った。

賑やかな店内。楽しそうな様子の客たちを横目に会計を済ませる。

なんだか惨めになって足早に外へ出ようとしたが、店の扉を開けてメイは立ち止まった。

突然の夕立。店内にいた時には、まったく気がつかなかった。

あまりに強い雨で、そこから動くことができない。

ザーザーと音を立てて降る雨は、視界さえも奪う。

店に入る人の邪魔にならないよう軒先に移動し、メイはぼんやりと雨を眺めた。する

と、徐々に視界がにじんできると、

「……うつ、ひつく」

こらえ切れなくなり、涙がこぼれ落ちた。

もう彼とは会えない。だけどそれ以上に、彼がメイの言葉にまったく耳を貸そうとしなかったことが悲しかった。

浮気なんてしていない。ただ、仕事が忙しくてなかなか会えなかっただけ。

何度そう言っても、彼はメイに冷たい視線を向けるばかりで、一向に話を聞いてはくれなかった。

涙が次から次へとあふれてきた。けれど、それを拭う気にもなれず、そのまま立ち尽くす。

ふと、視界の端に人影が映った。

泣いている自分が急に恥ずかしくなり、メイは慌てて頬を手の甲でゴシゴシとこする。そして、いつの間にか隣に立っていた人物に視線を向けたのだが、その直後、驚いてとっさに口を押さえた。

見上げるほどの長身に、スラリと長い手足。切れ長な目と長いまつげ。きれいで精神な横顔。

メイはその人物を見たことがあった。

彼は、メイが勤めている阿藤フードの若き専務、阿藤竜生だったのだ。

社内報によると、年齢はメイより十歳年上の三十五歳。

こんなところで、偶然にも会社の専務に会うなんて。

そう思った次の瞬間、メイは目を見開いた。

(どうして……?)

竜生の目からは、今にも涙がこぼれ落ちそうだった。

メイはその悲しそうな横顔を見て、眉を寄せる。

視線に気がついたのか、彼はメイのほうに顔を向け、優しい口調で尋ねた。

「そんなに泣いて、どうしたの？」

「あなただって……泣きそうですよ？」

メイがそう指摘すると、竜生は少しだけばつが悪そうにほほ笑んだ。

何も言わない竜生。メイは彼から目を逸らし、雨を眺めながらポツリと呟く。

「私……さつき彼に振られちゃいました」

自分の口から出てきた言葉に、メイは少しだけ驚く。だが、彼になら自分の気持ち可言えるような気がした。

「……俺も。今、振られたばかり」

竜生は、そう言って少し笑った。

「あはは！ おそろいですね」

「こういうの、おそろいって言うのかな？」

悲しい話なのに、不思議と穏やかな雰囲気にも包まれる。

お互いクスクスと笑い合ったあと、メイは先ほどより明るい声で言った。

「あーあ。好きだったんだけどな」

「……」

「好きだったんです。本当に、好きだったのに」

「……うん。俺も」

「ふふ、やっぱり、おそろいですね」

メイはその時、確かに心が軽くなっていくのがわかった。

大好きだった人に振られてしまった二人が、ほんの少しの間、雨の降る空を一緒に見上げる。

どちらも口を開かず、時間がゆつくりと流れていく。けれどその沈黙は息苦しいものではなく、居心地のいいものだった。

雨は次第に弱くなり、やがて雲間から光が差した。

「雨、やんだね」

「はい。やみましたね」

地面にできた水たまりがキラキラと輝いている。

そのまぶしさに目を細めながら空を見上げると、七色に輝く橋を見つけた。

「あ、虹！」

「本当だ、キレイだね」

なんだか嬉しくなって童生を見ると、彼も笑みを浮かべている。

先ほどまではあんなに暗い気分だったのに、不思議だ。そうしたら、なぜだか笑いが込み上げてきた。クスクス笑うメイに彼は少し驚いていたが、やがて彼も笑い出す。

ふたりでひとしきり笑ったあと、童生はまぶしそうに空を見上げて言った。

「じゃあ、行きますか」

「そうですね」

じゃあね、とお互い手を振り、自己紹介もしないまま笑顔で別れた。

ほんの少しの時間の出来事。しかし、メイはこれがかきつけて失恋を乗り越えることができた。

あの時、童生と過ごした時間が、メイの心を癒してくれたのだ。

童生は、失恋を乗り越えられたのだろうか。

メイとの時間が、少しでも彼の心を癒していたらいいのだが。

メイは社内でも童生を見かける度に、そう思っていた。

それから次第に童生を目で追うようになり、気がつけば淡い恋心を抱いていた。
 (でも、それだけ……なんだよね)

前進も後退もしない恋に、メイはため息をつく。

あの雨の日に、言葉を交わしただけ。たったそれだけの関係だ。

メイはあの日のことを大切に胸にしまい、今でも思い返すことが多い。けれど、童生がどう思っているのかは、わからない。

もしかしたら、あの日のことなんてすぐに忘れて、新しい恋に心を躍らせているかもしれない。

(あれだけモテる人だもん。誰か美人さんと付き合っていたりして)

想像すればするほど、悪いことばかり考えてしまう。

「……っ巴！」

「ん……っああん！」

ガツクリとうなだれた時、冬川と社長の声が聞こえてメイは現実引き戻された。そうだ、今は童生に想いを馳せている場合じゃない。

(とりあえずこの場所から早く移動して、二人に見つからないようにしなくちゃ)

あたりをキョロキョロと見回し、どこか隠れる場所はないかと考える。

そういえば、すぐ近くに給湯室がある。

(そうよ、給湯室！ しばらくの間、そこにしよう)

冬川と社長に見つかってはまずいので明かりをつけることはできないが、身を隠すにはちよよい。

メイは足音を立てないように細心の注意を払い、一步を踏み出そうとした。

その瞬間――

「っ！」

突然、背後から腕が伸びてきた。そしてメイの身体を拘束し、口を強引に押さえる。

「んんー！」

メイは必死に抵抗するが、腕はびくともしない。

(やばい、襲われる!?)

このままでは、自分の身が危ない。

冬川と社長にメイが廊下にいたことを知られてしまうが、今はそれどころではない。

メイは意を決し、相手の手に噛みついて力の限り叫ぼうとした。

だがその時、メイの耳元で鋭い声があった。

「静かに！」

「……っ！」

メイは、恐怖で固まってしまった。それほど低くてゾクリとする声だった。

身体がカタカタと小刻みに震え始める。本当に怖い時には、声なんて出せなくなるよ
うだ。

(これからどうなってしまおうだろうか……)

今、メイにできることといえば、ギョツと目を閉じることだけだった。

とその時、メイの身体がふわりと宙に浮く。

(え?)

突然のことに、メイは驚いた。思わずまぶたを開けると、自分の足と、逆さまの世界
が目に入る。

(え? え?)

視界の端に、商品開発課の扉が映った。扉は次第に遠ざかっていき、メイは自分が運
ばれているのだと気がつく。しかも、荷物のように肩に担がれて――

(どういうこと!? どこに連れていかれるの?)

その人物は、メイを肩に担いだまま、悠々と階段を上り始める。メイの目には、広い
背中しか映らない。

メイがただ唸然あぜんとしている間に、その人物はあるフロアへと足を進めた。メイがなん
とか身をよじって階段のほうに目を向けると、二十五階というプレートが見えた。それ
は、一般の女子社員が訪れることなどめつたにない、重役たちの部屋がズラリと並ぶフ

ロアだ。

フロアには、カツカツという男の靴音だけが響く。やがて、その音がピタリと止まった。
どうやら、目的の場所に着いたらしい。これからどうなってしまおうのか。想像すれば
するほど怖くなる。

メイが硬直していると、その人物は小さく呟いた。

「大人しくしていたな、いい子だ」

(……え?)

メイは目を見開く。

先ほど「静かに!」と威圧的に言われた時には恐怖のあまり気がつかなかったが、メ
イはその声に聞き覚えがあった。

驚きで言葉が出ないメイを担いだまま、その人物はある部屋の扉を開けて、ためらい
もなく中に入る。

その様子は、まるでここが自分の部屋だと言わんばかりだ。この重役フロアの一角に
ノックもしないで入ることができるのは、ほんの一握りだけ。

とすると、やっぱり「彼」なのだろうか。メイの胸は、ドキドキと高鳴り始めた。早
く顔を見て確かめたい。そう思った瞬間、メイの身体が再びふわりと浮いた。

「キヤッ!」

その人物が少しだけ強引にメイを下ろしたのは、フカフカのソファアの上だった。スプリングのきいたソファアに、メイの身体が沈む。仰向けに寝そべった状態になったので、天井と蛍光灯の明かりがメイの目に飛び込んできた。

そのまぶしさに目を細め、すぐさま起き上がるうとする。しかしそれを制止するように、メイを運んできた人物が覆いかぶさってきた。

視界いっぱい、彼の顔が映る。

メイの心臓は、大きく跳ねた。

(ち、近いよ……)

ずっと見ていることしかできなかった片想いの相手、童生。

その憧れの彼が今、なんと自分に急接近している。

(大好きな彼が今、私のことを見つめているの?)

そう意識したとたん、メイの身体は熱く痺れた。

「せ、専務?」

上ずった声でメイが呟くと、彼の目が少しだけ細められた。

その目からは、彼の感情を読みとることができない。メイはどうしていいかわからず、彼から視線を逸らした。

「企画部商品開発課の水沢メイさん、だね?」

「え?」

メイはゆっくりと瞬きをしたあと、彼の顔を再び見つめた。

まさか、童生がメイの名前や所属部署を知っているとは思わなかった。

阿藤フード本社には、社員が数百人もいる。役職もついていないOLのメイが重役と接する機会など、皆無と言ってもいい。それなのに、童生はなぜメイのことを知っているのか。

(……もしかして、あの時のコト、専務も覚えていてくれたの?)

メイがドキドキしながら見つめると、彼の顔にあの雨の日と同じ笑みが浮かんだ。

「久しぶりだね。一年前は?」

童生はあの時のことを覚えていたのだ。

じわりじわりと顔を近づけてくる童生に、メイは頬を赤らめる。

(ち、近いですってば、専務)

慌てるメイを見て、童生は優しくほほ笑んだ。

メイの心臓はますます高鳴り、嬉しさに頬が緩みそうになる。だが同時に、戸惑いも感じていた。

あの時、メイは名乗らなかった。けれど彼がメイの名前を知っているということは――
(もしかして私のこと、探してくれたの?)

少し考える時間がほしくて、メイは顔を背けようとする。しかし、許さないとばかりに、童生はメイの顎に手を添えて上を向かせた。

まるでキスをする時のような至近距離に、メイの目は泳いでしまふ。そんな彼女の慌てぶりを楽しむように、童生は口の端を上げた。

「さあて。君に聞きたいことがあるのだが」

「……はい。でも、あの、その前に起き上がってもいいでしょうか?」

そう言つてメイは起き上がろうとするが、童生はそれを許してくれない。

メイが目を見開いていると、童生の目がキラリと光った。

「だめだね。まだ、君の疑いは晴れていない」

「疑いだなんて! 私、何もしてません!」

彼の言葉に、メイは声を荒らげた。

眉間にしわを寄せるメイに、童生はそっけなく言う。

「じゃあ聞くけど、どうしてこんな時間に、あの場所にいたんだい? 一体、何をしていたの?」

「それは……!」

メイは理由を話そうと口を開いたが、童生はそれを遮った。

「今、社内には社長である兄と君の先輩の冬川さん、そして俺の三人だけしかないは

ずなんだけど?」

「ちゃんと守衛さんの許可は得ています! もし信じられないと言うのなら、守衛さんに聞いてみてください!」

「……」

メイは必死にそう言い募る。だが、童生は無表情のままだ。

「とにかくですね、家の鍵をデスクに置き忘れてしまったんです。今日は家に誰もいないので、鍵がないと家に入れなくて困るんです。だから、会社に戻ってきたんですけど……」

そう言ったあと、メイは言葉を濁した。

社長と冬川の激しい情事を思い出して、メイは恥ずかしさのあまり、それ以上何も言うことができなかった。

(うう……どうしよう。なんて言えばいいの?)

メイは、恥ずかしくて顔が熱くなるのを感じた。

「ふうんなるほど。鍵を取りに戻ってきたら、兄と冬川さんのセックス現場だった、と」

「……っ! そ、そうです」

コクコクとうなずくメイを見て、童生はニヤリと笑う。

その笑みはまるで時代劇に登場する悪代官のようで、あの雨の日に見た優しいほほ笑

みとはかけ離れたものだった。

メイの顔が強張る。

「へえ、それにしても、じっくり見ていたよね。君に人の情事を覗き見る趣味があったとは、いやはや」

「ち、違います！ そんな趣味ありません！ び、び、びっくりして動けなくなっちゃっただけで」

童生にとんでもないことを言われ、耳までカアツと赤くなる。

(どうしよう。どうしたら信じてくれるの?)

メイは、パニック寸前だ。

メイの視界が、にじみ始めた。グツと唇をきつく噛み、涙がこぼれ落ちないようにたえる。

童生はメイの目元に指を這わせ、浮かんだ涙をぬぐった。

「女の涙、か。鬱陶しいと思っただけ、君の涙はいいな……キレイだ。あの日のままだね」

「は!? ……んっ！」

メイは童生の言葉の意味がわからず口を開こうとしたが、唇をふさがれ言葉はすべて呑み込まれてしまった。

「ん……あは……んんっ！」

童生は、角度を変えて何度もメイに口づける。

息苦しくなってメイが口を開くと、待つてましたとばかりに、ヌルリと生温かい舌が滑り込んできた。

クチュクチュと淫らな音が聞こえてきて、メイは恥ずかしさのあまり、耳をふさぎたくなった。

童生はメイの歯列を舌でゆっくりなぞったあと、舌を絡ませて吸い上げる。

「あ……ふう……っ」

声を出さないよう我慢していたのに、メイの口からはついに甘い声がこぼれた。

口内を童生の舌で犯され、気がつくとき甘い痺れでソファから立ち上がる事ができなくなってしまう。

だからと力なく寝そべるメイから、童生はやつと唇を離す。

二人の口の中にツーツと銀色の糸が引き、プツンと切れた。

ハアハアというメイの荒い息遣いが静かな室内に響く。

あれだけ濃厚で情熱的なキスをしたというのに、童生は呼吸ひとつ乱していない。

それどころか、無表情でメイをジッと見つめてくる。

そんな彼を、メイはただぼんやりと眺めることしかできなかった。

静かなオフィスビルの一室——それも専務室で、憧れの彼とこんなキスをするなんて。

現状を把握すればするほど、メイは戸惑い、また恥ずかしくなった。

肩で息をするメイを見て、竜生は片眉を上げて意地悪そうに笑った。だが、瞳にはどこか哀愁が漂っている。

それはなんとも不思議な表情で、とても艶っぽく、竜生をより魅力的に見せていた。

「君には好きな男がいるよね？」

「え……？」

竜生の低く響く声に、メイの胸はドクンと大きく跳ねた。

無理やりキスをしたあとに、そんなことを聞くなんて。

どういう意図があるのだろうか、メイは目を白黒させた。

(もしかして、専務は私の気持ちを知っているというの?)

誰にも言わず、こっそりと温めていた恋心なのに。

メイは驚きを隠せず、竜生を見つめた。

鼓動がどんどん速くなる。顔も、ありえないぐらいに熱い。

竜生の次の言葉が早く欲しい。でも、欲しくない。彼の意図を知るのが怖い。

メイが黙り込んでいると、彼はさらに続けた。

「君が好きな男は、この会社にいるんだろう？」

「……っ！」

やはり、竜生はメイの気持ちを知っている。

どうして、なぜ? そんな言葉ばかりが頭の中をグルグルと回る。

顔を背けてしまいたいのに、竜生はそれを許さないとばかりにメイの頬を両手で包み込む。

ひどく驚いているメイの顔を見て、竜生は一瞬、苦しそうに顔を歪めた。

そして、彼は自嘲気味にクスリと笑う。

「その男に……君の上司である加藤には、今日のことを知られたくないよね」

「え?」

竜生の口から出てきた名前に、メイはパチパチと瞬きをした。

加藤とは、商品開発課の課長である。面倒見がよく、確かにメイも彼を慕っている。

だが、どうして加藤の名前がここで出てくるのか。

メイの好きな人。それは目の前にいる竜生だというのに——

二人の視線が絡んだ瞬間、竜生は困ったような表情を浮かべた。

「加藤に俺とのキスのことをばらされたくなければ、さっき見たことは忘れること」

「そんな……そんなこと言われなくて、誰にも言いません! 言えるわけないじゃ

ないですか！」

「そうであってほしいと、願っているよ」

「だから、言いませんってば！」

ムキになるメイに、竜生は少し落ち着いた表情になった。

これで彼の用事は終わりなのだろうか。メイはそつと息を吐き出し、起き上がるため
に竜生の胸を押しつけようとした。

しかし、話はまだ終わっていないかった。

竜生は、クスクスと楽しそうに笑い出す。

「まあ、ばらされたら困るよね？」

「え？」

彼は、片手でメイの手をキュツと握る。

「もし今夜見たことを誰かに話したら……、君の趣味もばらすからね」

「趣味って？」

「だから、人の情事を覗き見するという趣味」

「そんな趣味ありませんっ！」

失敬な、とメイが怒りを露わにすると、竜生は笑いをこらえるように肩を震わせた。

「フッフ。わかってるよ。ただ、人の噂って怖いからね。嘘でも、人は信じてしまう

ことがあるから」

「……」

要するに、メイがあらぬ趣味を持っているという嘘を会社中に広めてしまうぞ、と竜生は脅しているのだ。

まったくもって、いい迷惑だ。メイが眉間にしわを寄せて睨みつけると、竜生はウインクをしてメイの頭をそつと撫でた。

態度や言葉とは裏腹に、彼の大きな手は優しく温かい。

そのギャップに戸惑うメイに、竜生は真剣な眼差しで呟いた。

「とにかく、誰にも言わないでね？」

「だから、わかっていますってば！」

そもそも、冬川はメイにとって大切な先輩である。

このことは、墓場まで持っていくつもりだ。

「私は冬川さんのことが大好きです。だから、冬川さんが困るようなこと、言いふらしたりしません。ご心配なく！」

メイは頭にきて、怒鳴るように言い放った。

ツンとそっぽを向いたあと、どいてください、と目の前にいる竜生の胸を押す。先ほどとは違い、竜生がすぐに身体をどけたので、メイはやっと起き上がることができた。

こんなところからはすぐさま退散だ、と腰を上げようとした。しかし、足に力が入らない。

（ちよつと待つて。一体、これはどういうこと？）

先ほどされた童生からのキスで、メイの身体はまだ甘く痺れたままだったのだ。

困った様子のメイに、童生はブツと噴き出す。

樂しげに笑う童生を、メイはキツと睨みつけた。

だが、それさえも楽しいと言うように、童生は意地悪く口角を上げる。

「クククッ。そんなに俺のキスがよかった？」

「違います！ これは、なんていうか……！」

「光栄だな」

「だから、違いますってば！」

メイは、ガクガクしている膝に何とか力を入れて立ち上がる。

その様子を腕組みしながら見つめていた童生は、「もうひとつ、追加しようかな」と

意味深なことを咬き、ほほ笑んだ。

その瞬間、メイの全身がゾクリと粟立った。

「君への口封じ」

「へ？」

童生はメイに近寄り、彼女の唇をツンツンと指先でつついた。

メイはなんのことだかわからず、首をかしげる。だが、もう一度同じ動作をする童生を見てその意味を察し、顔を真っ赤にした。

「毎日、君のその可愛い唇にキスをしよう」

「なっ！」

「今回のことを君が絶対に他人に話さないだろうと、俺が判断するまでね。そうだな、交換条件ってやつだよ」

メイは口をパクパクさせるだけで、何も言えない。

童生は、そんなメイの唇に指を這わせて反応を楽しんでいる。

まるで、新しいおもちゃを見つけたとでも言うように。

まったたく、いい性格をしている。メイは、地団太を踏んだ。

ムキになるメイを見て、童生はますます笑う。

どうやら、彼にからかわれているようだ。メイは急に、ドツと疲れを感じた。

（ああ、もう。なんか泣きたい……）

メイは再び目頭が熱くなったが、目の前の童生にそれを悟られたくなくて、唇を強く噛む。

何が悲しくて、好きな人からこんなことを言われなければならないのだろうか。

その上、メイは加藤が好きなのだど勘違いをされているようだ。誤解を解く気力もない。とにかく、今日はもう帰ろう。

「では、失礼します」

メイがそそくさと頭を下げて専務室を後にしようとしたその時——
(え……?)

先ほどと同じように童生の肩に担かかがれたメイは、何度か瞬またきをしたあと、状況を把握した。

「ちよ、ちよっと！ 降ろしてください！」

ジタバタと暴れ、キャンキャン叫ぶメイ。だが、童生はそんなメイにはお構いなしで歩き出す。

「車で送ってあげるよ。ああ、その前に商品開発課に行かなくちゃね。そろそろ二人も帰っただろうし。鍵を取りに行こうか」

「遠慮いたします。自分一人で行けます」

「ダーメ。そんな色っぽい顔して電車に乗る気？ ナンパの餌食えじきになっちゃうよ？」

「え、餌食えじきって……」

「つてことで、人の好意には甘えなさい。メイちゃん」

慌てふためくメイを見て、童生は楽しそうだ。

何度抗議をしても、童生は笑っているだけで話を聞いてくれない。

メイはななかば諦めながら、童生の様子をこっそりとうかがった。

態度や口調には、先ほどまでの意地悪な感じはまったくくない。

優しい雰囲気伝わってきて、こんな状況下だが少しだけ安心した。

意地悪で、どこか冷たい童生。

人当たりがよくて、優しい童生。

一体、どちらが本当の童生なのだろうか。

わからないことばかりだ。

童生は、メイを担かかいだまま商品開発課のある二十二階のフロアに足を踏み入れた。

しかし、そこでもまだメイを降ろしてくれない。

「逃げませんから、もう降ろしてくださいってば」

「そんなの、わからないからね。用心って必要だと思わない？」

そんなやり取りをしていると、いつの間にか商品開発課の前まで来ていた。中に入ると、すでに冬川と社長はいなくなっていた。メイは、心底ホッとすする。

「メイちゃんのデスクはどこ？」

「……」

「早く言わないと、兄貴たちの二の舞になるけど。いいの？」

「……っ！　そ、そのデスクです。家の鍵は二段目の引き出しの中です」

メイが慌てて言うと、童生は鼻歌まじりでうなずいた。

引き出しから鍵を取り出した童生は、「これ、メイちゃんに似ているね」と呟く。

なんのことだろうと首をかしげたメイだったが、それが家の鍵に付けたキーホルダーのことだと気がついて、顔をしかめた。毛糸で編んで作ったタヌキのキーホルダーだ。

「私の顔、タヌキみたいってことですか？」

「愛嬌があつて、可愛らしい顔をしているって言ったんだよ」

「……」

「鍵もあつたし。さあ、帰ろうか」

童生はメイを担いでエレベーターに乗り、裏口を指す。

メイは、社内に誰も残っていないとよかつたと安堵した。

もし誰かにこの状況を見られてしまったら——想像するだけで恐ろしい。

しかし、よくよく考えてみれば、社員はいなくとも守衛はいる。

案の定、守衛はメイを担いだまま裏口を通る童生を見て、呆気に取られた顔をした。

居たたまれなくなったメイは、身体を小さく丸めた。

そんなメイの気持ちなどお構いなしに、童生はカツカツと靴音を響かせて颯爽と歩いていく。

童生の車は、重役専用の駐車場に停められていた。

彼はメイを肩から降ろすと、助手席のドアを開けて座るようにうながす。

このまま逃げてしまいたかつたが、童生の鋭い眼差しに負け、メイはしぶしぶ助手席に乗り込んだ。

「さあて。メイちゃんのお家はどこかな？」

「……」

運転席に乗り込んだ童生は、助手席に座っているメイに自宅の場所を聞く。しかし、

メイは黙り込んだままだ。

(こうなったら、黙秘だ)

メイがツンとそっぽを向くと、童生は運転席から身を乗り出し、突然、親指をメイの唇にあてた。

メイは驚いて童生の顔を見る。

すと思うたよりも顔が近くにあつて、メイの心臓は再び高鳴った。

童生は、親指でメイの唇をゆつくりとなぞりながら言う。

「こちらが聞いているのに黙っている悪い口は、これ？」

「せ、専務!？」

「そんな悪い口を開かせるためには、またキスしなくちゃいけないのかな？」

メイは、慌てて答えた。

「は、は、春ヶ山駅です」

「んー？　メイちゃんは駅に住んでいるんじゃないだろう？」

「……」

「メイちゃんの住んでいる家の住所を聞いているんだけど？」

このまま住所を言わなければ、また強引にキスをされるかもしれない。

メイは大きなため息をひとつ漏らすと、小さく呟いた。

「春ヶ山駅近辺にある、春蘭学園のすぐ側です」

「ラジャー」

童生は車のエンジンをかけ、ゆっくりと車を発進させる。

乗り心地のよいシートに身を任せながら、メイはドキドキする胸のあたりをギュツと

掴んだ。

（本当にキスされるかと思った）

童生と顔を合わせないように、メイは窓の外に目を向ける。だけど、どうしても気にな

なって、運転している童生の横顔をチラリと盗み見た。

先ほどとは打って変わり、真剣な顔で運転している童生を見て、メイはこっそりと思う。

（専務って……こんな強引な人だったんだ）

喫茶店の軒先で虹を見た日には、そんなふうには感じられなかった。

なんだか今夜はいろんなことが起こりすぎて、すでにメイはいっぱいいっぱいだ。

それに、童生からされたキスで、まだ身体が甘く痺れている。

あのキスは、威力がありすぎた。

降ろして、と抵抗はしたが、童生に担がれていなければ、まともに歩くことができな

かったかもしれない。

もしかして、童生はそれに気がついていたから、無理やりメイを担いだのだろうか。

優しいのか、意地悪なのか。阿藤童生という人物がわからない。

メイはそっと自分の唇に指をあてた。

キスが初めてだったわけじゃない。

（だけど……）

何も考えられなくなるような、あんなキスはしたことがない。メイの頬がうっすらと赤く染まった。

渋滞もなく順調に春蘭学園まで来ると、童生は車を路肩に停めてハザードをつけた。

「メイちゃん。お家はここからすぐなんだよね？」

「あ、はい。すぐその……青いポストがある家です」

メイが自宅を指差して教えると、童生は少しだけ心配そうにメイの顔を覗き込んだ。

「メイちゃん。今日はお家の人はいないんだろう？」

「あ、はい」

「ちゃんと戸締まりして、気をつけるようにね」

「……ありがとうございます。気をつけます」

メイはペコリと頭を下げたあと、童生から一刻も早く離れるため車から降りようとした。

だが、それはできなかった。

運転席から伸びてきた腕に抱きしめられたからだ。

「せ、専務」

上ずったメイの声を聞いて、童生は満足そうに笑う。

「さっきの『交換条件』のこと。忘れないでね？　メイちゃん」

メイの耳元で囁く彼の声は、腰が砕けてしまいそうなほどセクシーだった。

童生は、チュツとリップ音を立てて、メイの頬にキスをしてくる。

「う、うわあっ!!」

メイが慌てて離れようとすると、童生はすぐに腕を緩めてメイを解放した。

専務室ではあんなにしつこかったのに、呆気ないぐらいにさっぱりとしている。なんだか拍子抜けだ。

(本当に調子が狂う。専務……阿藤童生という男は読めないわ)

とにかく早くこの場から逃げようと、メイは車の外に出て扉を閉める。

すると、助手席側のウインドウが開いた。

「早くお家に入りなさい」

童生はそれだけ言うと、車を発進させた。

「本当に……一体なんなのよお」

真面目な顔をして脅してきたと思ったら、ヘラヘラ笑って冗談みたいなこともする。

どう対応すればいいのか、困惑するばかりだ。

メイは先ほど童生にキスされた頬を押さえながら、いつまでも車のテールランプを見つめていた。

第二章 甘く危険な交換条件

それは、突然の辞令だった。

翌朝、いつものように出社したメイは、自分のデスクに座りパソコンを起動した。メールをチェックしながら、今日も忙しい一日になりそうだとため息をついていると、「水沢！」と名前を呼ばれて顔を上げた。

声の主は、課長の加藤だった。

手招きをされ、どうしたのかと首をかしげながら加藤のもとへと急ぐ。

そこで言い渡されたのは、驚愕の辞令だった。

加藤から手渡された紙切れを見て、メイは固まる。

「今日付けで、水沢は専務付きの補佐にまわってもらおう」

「は!？」

メイは、思わず大きな声で叫んでしまった。すかさず、手元の紙に視線を落とす。

企画部商品開発課 水沢メイ殿

平成×年×月×日付で専務付き補佐に任命する

その辞令書には、今日付けでのメイの異動が指示されていた。

加藤の顔と辞令書を交互に見る。そんなメイを見て、さすがの加藤も苦笑いだ。

どうということなのだろう。

そもそも、専務付き補佐なんて聞いたことがない。一体、どんな仕事をすると言うのか。メイは救いを求めて、加藤をじっと見つめた。

しかし、彼も困ったように眉をひそめている。

「あっちも強引でな。なんとかしてやりたかったんだが……すまない」

加藤に頭を下げられてしまい、メイは慌てる。

「加藤課長！顔を上げてください。課長が悪いわけじゃないんですから」

「しかしなあ……あまりに突然すぎるだろう。異動の時期でもないのに。何を考えているんだ、アイツは」

加藤は舌打ちをしながら、顔をしかめる。普段の穏やかで優しい加藤からは考えられない仕事だ。不思議に思い、メイは尋ねた。

「アイツ？」

加藤がアイツと呼んでいるのは、専務である竜生のことなのだろうか。

メイは加藤をじっと見たが、彼は笑ってごまかした。「とにかくだ、水沢。決まってしまったものは仕方がない。腹くくってがんばれ」

「……はい」

「専務付きの秘書はきちんといる。それとは別に補佐が付くなんて異例中の異例ではあるが、心配するな。水沢の業務内容については、きちんと説明もされるだろうから……」

「……専務の補佐ということは、今の仕事とはやはり違うのでしょうか？」

メイは普段、加藤の補佐としてスケジュールを組んだり、進行の管理をしたりしている。その他、人手が足りなければ雑務なども手伝う。

しかし専務ともなれば、もっと重要な仕事が増えてくることだろう。はたして自分にできるだろうか。

あれこれ考えれば考えるほど、不安ばかりがふくらむ。

ふと前を見ると、加藤が優しげにほほ笑んでいた。

「あつちは専務だから……いろいろ大変なことがあるとは思いますが、水沢は気が利くし、仕事もがんばってくれている。大丈夫だと思うぞ」

「……そうでしょうか」

メイは小さな声で言い、うつむく。

「ああ、ずっと一緒に仕事をしてきた俺が言うんだから間違いない。安心しろ」

加藤は大きくうなずき、メイの肩をポンポンと叩いた。

「もし何かあったら、すぐに俺に言え」

「え？」

顔を上げると、加藤が心配そうにメイをじっと見つめている。思わず手に力が入り、辞令書をギュッと握りしめてしまった。

慌ててそれを伸ばしていると、加藤は困ったように天井を見上げた。

「悪いヤツではないんだが……強引なところがあるからな」

「は、はあ……」

意味がわからずに、メイは再び首をかしげる。

やはり、加藤は専務と知り合いなのだろうか。それも、意外と親しい関係なのかもしれない。

「あ、いや、なんでもない。とにかく、何かあったら相談に乗るから」

加藤は慌てたようにそう言うと、話を終わらせた。

これ以上詮索しても、おそらく加藤は笑うだけで何も教えてくれないだろう。

少しだけ気になったが、メイは口を噤む。

それよりも今メイが考えなければならぬのは、この辞令についてだ。

突然ではあるが、決まってしまったのなら仕方がない。

会社員として、異動先で仕事をまっとうしなければならぬ。

メイが覚悟を決めて席に戻ろうとすると、同じ課の人たちが心配そうな視線を向けているのに気づいた。

こうもあからさまだと、せっかく覚悟を決めたのに心が折れそうだ。

メイはますますこの異動が恐ろしくなってきたてしまい、眉を下げた。

専務付き補佐。それは、竜生の傍で仕事をすることだ。

メイがずっと恋心を抱いていた相手。そんな彼に昨日は濃厚なキスをされ、今日からは毎日顔を合わせる事になったのだ。メイは複雑な気持ちだった。

席に戻り、大きなため息をつくとき、後ろから声をかけられた。

「メイちゃん」

「あ……冬川さん」

振り向いたとたん、メイの胸はドクンと大きな音を立てた。

昨夜の社長と冬川の情事が頭にボンと浮かび上がり、顔が熱くなる。

(ダメダメ、昨日のことは忘れなくちゃ)

これは冬川のためでもあるし、メイのためでもある。

とにかく、冬川に悟られてはいろいろとまずい。

メイは、なんとか冷静になれと自分に言い聞かせたあと、冬川に向かってほほ笑んだ。

すると、冬川は不安で仕方がないといった様子でメイを見つめてくる。

「メイちゃん、急なことで不安になっていない？ 大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

自分のことのように親身になってくれる冬川に、これ以上心配をかけてはいけない。

つとめて明るく振る舞うメイを見て、冬川は眉をひそめた。

「それならいいんだけど……」

「本当に大丈夫ですって。冬川さん」

トンと胸を叩いて大丈夫だとアピールすると、冬川の様子がやわらいだ。

「メイちゃんは仕事もできるし、上司としては心配していないのよ」

「冬川さん」

「ただ……異動先が納得いかないというか、強引に手をまわした感じが否めないというか……とにかく、私もなんとか掛け合ってみるから」

「ありがとうございます、冬川さん」

冬川の優しさに感動して、メイはますます商品開発課から離れたくなくなってしまった。

だが、異動しないわけにはいかない。手にしている辞令書は、「異動しなさい」と言っているのだ。

すると、急に童生に対する怒りがふつふつと込み上げてきて、メイは唇をギョツと噛みしめた。

こんな事態になってしまったのは、彼の仕業に違いない。
(せめて、文句くらいは言ってやるんだから！)

冬川との会話のあと、メイは自分のデスクを整理した。段ボール一箱分になったメイの荷物は、あとで課の人が届けてくれるらしい。

ひとまず、クリアケースに入れた辞令書を片手に、メイは専務室に向かった。

少しでも気持ちいを落ちつけようと、あえて階段を使う。しかし、いざ専務室の重厚な扉を前にすると、緊張して身体が震えてしまった。

(ううん、しつかりしなくちゃ)

意を決してノックをすると、中から「どうぞ」という童生の声が聞こえた。ヨシツと小さく呟いて、メイは扉を開く。

「え？」

緊張をごまかしながら専務室に入ったメイは、目を見開いた。

すでにメイの受け入れ態勢が万全だったからだ。

昨日ここに来た時にはなかったデスクが運び込まれ、パソコン機器もすでに設置され

ている。専用の電話まで置かれていた。

専務室を見回して呆気にとられていると、ソファーに腰かけていた童生が立ち上がり、手招きをした。

メイは近づくののをためらったが、すぐそばに彼の秘書がいるのを見て、ホツと息を吐いた。

専務の第一秘書である古川^{ふるかわ}。

年は五十代のなかば。落ち着いた雰囲気でもとても優しく、「すてきなおじさま」と女社員たちからの人気も高い人物だ。

漫画に出てくる執事みたいだ、と誰かが言っていたことを思い出す。

そのたとえは、とても的を射ているとメイは思った。

古川はメイと視線が合うと、にっこりとほほ笑んでくれた。

そんな古川を見て、メイの顔にも笑みが浮かぶ。少しだけ、肩から力を抜くことができた。

今後、この人がメイをいろんな意味で助けてくれるに違いない。

(古川さんが近くにいてから大丈夫)

メイは自分自身を勇気づけて、童生に警戒心を抱きながら少しずつ近づいていく。すると、童生は苦笑した。

「おはよう、メイちゃん。ようこそ専務室へ」

「……」

「君を歓迎するよ？」

にっこりと笑う童生だが、その笑みには何か別の意図もあるような気がしてならない。童生から言われた言葉を鵜呑みにはできないと、メイは顔をしかめた。

メイは手に持っていたクリアケースから先ほどもらった辞令書を取り出し、テーブルにダンッと叩きつけた。

「これは、どういうことですか!？」

「どういうことって？ 今朝、君の上司の加藤から辞令を言い渡されただろう？ そのままの意味だよ」

「こんな時期外れに異動なんて。それも重要ポジションである専務付き補佐に、どうして私が!? ありえませんか!」

「君は仕事ができるって、加藤と冬川さんから聞いていたんだ」

童生は人の良さそうな笑みを作っているが、どうにも胡散臭い。

嘘です！ とメイが言うと、童生は困ったように肩をすくめた。

「嘘ではないよ。前々から君を俺の補佐として異動させたいと、加藤にも言っていたんだ」
「え？」

それは初耳だ。

加藤からは、そんな話を聞いたことがなかった。

人事に関することはデリケートなので、しっかりと決まってからでないと見えなかったのかもしれない。

しかし、商品開発課のメイに、専務付き補佐という職務がまわってくるというのは、どう考えてもおかしい。

そもそも、阿藤フードにはきちんと秘書課が存在するのだ。

どうしても補佐が必要ななら、秘書課が請け負うべきだろう。

「君は疑っているようだけど、本当のことだよ。うちの社でも一、二を争うほど仕事が忙しい加藤の補佐として、しっかりと働いているのを評価したんだ。それに君の上司たちが手放して君を賞賛するものだからね。俺が君を補佐として欲しがるのも、うなずけるだろう?」

それは本当のことなのだろうか。わからないが、メイにとっては嬉しい言葉だった。童生は続ける。

「本当はもう少し先の予定だったんだけど時期が早まっただけ。なんせ君は、我が社の重要な秘密を知ってしまったんだからね」

「それって……」

竜生が言っているのは、昨夜のことだろう。メイが頬を赤らめると、竜生はフンと鼻で笑った。「俺のそばに置いて監視するのは当然。君がいつ口を滑らせ^{すべ}るか分からないからね。保険だよ、保険」

「私、絶対に口外しません！　そこまで信用がないんですか？」
竜生の言葉に、メイの胸はズキズキと痛んだ。

（専務に、こんなに疑われているなんて……）
好きな人に疑われるのは辛い。前回の恋で経験し、感じたことだ。

また今回も、好きな人に信じてもらえないのだろうか。

そんな恋の結末を迎えてしまうのだろうか。

メイが思わず、感情のままに声を張り上げようとした時だった。

コンコンと扉をノックする音が室内に響く。話はいったん中断され、古川が扉まで歩いていく。

彼はこの部屋に訪れたのが誰なのかわかってしている様子で、「はい、どうぞ」と声をかけて扉を開け、廊下に出ていった。

古川と入れかわりに、背の高い人物が入ってくる。

その人物の顔を見て、メイは目を丸くした。

「じゃ、社長？」

「昨夜は……どうも」

戸惑ったような笑みを浮かべて、社長がメイに言う。

「……」

なんと返事をしたらよいものか。

メイもまた困ったような表情で、所在なさげにペコリと頭を下げた。

立ったままのメイに、社長はソファに座るようにすすめてきた。

少しだけ躊躇^{ちゅうちゆ}したあと、メイはソファに座る。

しばらくの間、気まずい空気が部屋中に漂う。

メイの正面に腰かけた社長をチラリと見ると、彼もまた苦い顔をしていた。

社長の顔を見て思い出すのは、もちろん昨夜の出来事だ。社長の様子からして、メイがあつた場にいたことを知っているのだろうか。

竜生が昨夜のことを話したに違いない。だからこうして忙しい仕事の合間をぬって、メイと対面する時間を設けたのだ。

しかし、メイとしては社長と顔を合わせたくはなかった。一体、何を話せばいいと言うのか。

重くて息苦しい雰囲気^{きふんき}に居たたまれなくなり、メイはこのまま逃げ出してしまいた

かった。

そんな中、口火を切ったのは社長だった。

「話は全部、童生に聞いたよ。恥ずかしいところを見せてしまったようだ。申し訳ない」
頭を下げる社長を見て、メイは瞬きをしたらあと慌てて言った。

「そ、そんな……！ 頭を上げてください！」

確かに会社であんな色っぽいことをするのはどうかと思うが、まさか社内に人が残っているとは思わなかったのだろう。

メイが懇願に近い形で叫ぶと、やっと社長は頭を上げてくれた。

そして少しだけづつが悪そうに、言い訳を口にする。

「ずっと海外に出張に行っていたから、嫁に会うのは久しぶりで……」

「は？ よ、嫁？」

あまりに意外な言葉が出てきたため、メイは混乱してしまった。

表情をコロコロ変えて慌てふためくメイを見て、社長は困ったように眉を下げる。

「ああ、そうか。これはトップシークレットだったな。だが、ここまでバレていたら、全部話してしまったほうがいいだろう」

フムと考え込むように呟いたあと、社長は腕組みをしてメイに視線を向けた。

「君の先輩でもある冬川巴。彼女の本名は、阿藤巴なんだ」

「え!？」

「一年前に結婚したんだが、彼女がどうしても仕事を続けたいと言うんでね。旧姓のまま仕事を続けているんだ」

「……なるほど」

「彼女が仕事を続けるためには、私と結婚しているということを伏せなくてはならなかった。これには、いろいろ事情があつてね。そういうわけだから、君たちに本当のことを話せないでいる巴を責めないでやってくれないか」

「も、もちろんです！」

仕事をしていく上で、社長と結婚しているということを伏せておきたかった冬川の気持ちをはわかる。

社長の妻だと知られると、社員たちの態度だって、きつと変わってしまうだろう。

仕事熱心な冬川なら、そんな仕事がいらい環境は避けたいと考えるに違いない。

うんうんとうなずくメイを見て、社長はやわらかい笑みを浮かべた。

童生に比べるとガタイが大きく、筋肉質な体型の社長。スマートな印象の童生とは、タイプが違う。

そんな二人だが、こうして笑った表情はそっくりだ。

やっぱり兄弟なんだな——メイは社長の隣に座っている童生をチラリと見る。彼は

前かがみになって両手の指を組み、静かにやり取りを聞いていた。

メイが再び社長に視線を向けると、彼は懇願するような表情を浮かべた。

「それから……昨夜のこと。君がああ現場にいたということを書は知らない。できれば、彼女の耳には入れたくないんだ。悪いがこのことを巴には……」

「わかっています。大丈夫です！」

力強くそう言っていると、社長は安心したように息を吐き出した。

「ありがとう、助かるよ」

「いえ！」

顔の前でブンブンと手を振るメイに、社長は優しく声をかけた。

「突然の異動で申し訳なかったね。実は、以前から君には童生の補佐をしてもらいたいと思っていたんだ」

「え？」

社長の言葉は、先ほど童生が言っていたのと同じ内容だ。

(つてことは、本当に今回の異動は前々から決まっていたということ?)

「いまだに本当のことなのかと疑っているメイを見て、社長はクスリと楽しげに笑った。「君の仕事ぶりは、巴からも聞いている。だから私も君を専務付きの補佐にと望んでいたんだ。ただ、巴は最後の最後まで渋っていた。きつと、君を近くで育て上げたかった

んだと思う。あとで私がみっちり絞しぼられそうだよ」

「は、はあ……」

先ほど、確かに冬川はメイの異動に反対していた。

社長の口振りだと、今回の人事異動については冬川も事前に聞かされていなかったようだ。

(……でも、昨日の今日だからね。本当に、まさかの展開だよ……)

メイは、肩をすくめた。

「詳しくは童生から聞いてくれ」

社長はクスクスとおかしそうに笑うと、メイの肩をポンと叩いて専務室を出て行った。シンと静まり返る専務室。古川はまだ戻ってこないの、ここには今、童生とメイの二人しかない。

童生は、メイをじっと見つめてくる。その視線にどこか熱いものを感じて、居心地が悪く。

手持ち無沙汰ぶさたになったメイは、モジモジと指をいじりながら、童生にチラリと視線を向けた。

すると童生と目が合ってしまった。慌ててうつむいた。

メイの鼓動がどんどん速くなっていく。

昨夜、このソファでされた強引なキスをふと思い出し、身体が熱くなってしまう。メイは沈黙に耐え切れなくなつて、童生に声をかけた。「今回の異動つて……昨日のことの……保険なんですよね」「そうだね。それはまあ、オマケみたいなものなんだけど。とりあえず、今は教えてあげない」

童生は、それ以上は何を聞かれても答えないと言う。人当たりのよさそうな笑みを浮かべているが、腹の中では何を考えているのかわからない。

まったくもつて、阿藤童生は厄介な男だ。

メイがこつそり息を吐き出すと、童生は小さな声でメイに尋ねた。

「ところで……加藤は、君の異動について何か言っていたかい？」

「え？ 加藤課長ですか？」

「ああ」

突然出てきた加藤の名前。昨夜といい、どうして加藤の話題が出てくるのだろう。

いたつて普通に尋ねてきた童生だが、その視線はどこか厳しいものだった。面白くない——そんな感情を隠しもせずに、童生はメイの瞳に問いかける。いきなり機嫌が悪くなった童生を見て、メイは緊張してしまう。

立ち読みサンプルはここまで

「加藤課長には、何か困ったことがあったら相談しなさいと言われましたが」

「アイツは……相変わらずフェミニストぶつて」

チツと舌打ちをする童生。

どこかで見たことのある仕草だと、メイは思った。

（あ、そうだ。加藤課長だ）

先ほど、加藤も同じように舌打ちをしていた。そんな加藤を見たことがなかったので、驚いてしまったのだ。

腕組みをして苦い表情を浮かべている童生に、メイは気になっていたことを尋ねた。

「加藤課長とは、お知り合いなんですか？」

「ああ。アイツは高校の頃からの腐れ縁だよ」

「なるほど。そうだったんですか」

これで納得がいった。

加藤の口振りで、なんとなくだが童生と加藤は親しいのではないかと思っていたが、やはりそうだったらしい。腐れ縁とは言うが、童生の碎けた口調から気の置けない仲なのだとわかる。

フムフムと納得しながら考え込むメイを見て、童生は面白くなさそうに口を尖らせた。

「ふーん？ 好きな男のことは気になるみたいだね？ メイちゃん」